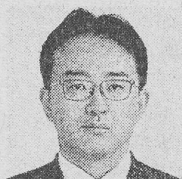


米の交渉力低下



佐橋亮・東大教授

今回の米中首脳会談は、米国と中国の対等性を示すものとなった。これまで米国は中国を変えようとし、10年前からは、圧力をかけるとして対立していた。しかし、今回は明らかに中国から成果をもらうための交渉となっていた。

背景にあるのは、米中をとりまく環境の変化だ。米国は、対イラン攻撃の終わりが見えず、同盟国を含む対外的な支持を失っている。これに対し中国は、国内経済が弱含みとはいえ、総合的な国力を増した。習近平国家主席は、11月の米中間選挙を前に、トランプ大統領が目先の成果を求めていることも理解した上で、目に見える「お土産」を渡した。米国の交渉力が低下する中、中国のそれは確実にあがっている。

中国がほしいのは体裁だ。会談で米国と安定した関係を維持し、対等な立場でテーブルについたことを内外にアピールできた。台湾問題に関しては、その重要性を徐々にトランプ氏に示せばいいと考えていて、成果がなくとも問題とは捉えていないだろう。一方で両国関係は昨年10月の首脳会談で安定化しており、今回は転換点とは言えない。地域の安全保障への影響も少ないといえる。年内に3回の首脳会談の可能性があり、その中で中国側が両国関係の安定以上に何を求め、どのように関係を詰めていくのかを注視する必要がある。 【聞き手・石山絵歩】